

## とうきょう すくわくプログラム活動報告書

幼稚園・学校番号	1700413
施設名（園名等）	きよみ幼稚園

### 1. 活動のテーマ

<テーマ>

からだの使い方

<テーマの設定理由>

園庭遊びの鉄棒や縄跳び、鬼ごっこや、室内での体操あそびの中で、なんで足が速い子と遅い子がいるの？なんで柔らかいの（関節）？など子どもが気になる点が多くあることに気が付いた。よって、「体」を一番に使う体操あそびに着目することにした。当園は園庭が砂地とゴムチップの2箇所あるという強みを生かし、環境が異なることでの発見も期待できる。

### 2. 活動スケジュール

令和7年4月～令和8年3月

### 3. 準備した素材、道具、環境設定

クラス担任、体操指導員、音響、ボール、フープ、マーカーコーン

### 4. 活動の内容

「なぜそうなるのか？」という子どもの問いを重視した。

#### ① 「体の不思議」

当初、子供たちは「体が柔らかい＝すごい」という認識でしたが、活動を通じて「自分の体はどう動くのか」という構造への興味に変化していきました。

#### ・発見

柔軟体操の際、担任が「どこが伸びている感じがする？」と問いかけると、子供たちは自分の足を触りながら「ここは硬い骨がある」「ここは伸びるお肉（筋肉）がある」と発見し始めた。

#### ・子どもの対話

「膝を曲げないでつま先を触るのは難しい」と言うと、「お尻を少し後ろに引くと、もっと手が届くよ」と助言。それを聞いた他の子も試し、「本当だ！」「こっちの方が伸びる！」と、自分たちの体を使った実験場のような光景が広がった。

・職員のフォロー

職員、体操指導員は、正しい形を指示するのではなく、「次回はどうか？」「次は違った動きの体操をやってみよう」などと、子どもの探求がより深くなるよう声掛けを行い、同じ動きで繰り返し行うことでどうかわかるか、違う動きでどう変わるかを促した。

②「どうすれば遠くへ飛ばか？」

ボール投げの活動では、単に回数をこなすのではなく、「遠くへ飛ばすための作戦会議」を行った。

・気付き

最初は全員が正面を向いて投げていたが、一人の子が「上手な子は、体が横を向いている」と気付いた。「横を向いてから、ビュンって回ればいいんだ！」という発見が共有されると、次は「足の踏み出し」に注目が移った。その後も回数を重ねるにつれ「投げる手と反対の足を出すと、力が入りやすい」や、「投げる手と反対を目標物に向けてと良い」「手を早く移動させる」などという自分たちなりの法則を見つけ出し、翌週翌週の活動で検証する姿が見られた。

・学び

足の出し方を意識しすぎて、逆にボールを地面に叩きつけてしまう子もいた。しかし、そこで「失敗」と片付けるのではなく、「力が入るタイミングが早かったのかな？」と、失敗を次に活かす姿が印象的だった。

③「速く走るためのフォーム改革」

「足が速くなりたい」という探求心

・発見

「足だけを速く動かそうとしても、体がグラグラする」という課題に対し、担任と指導員が連携して、あえて「腕を振らないで走る」「腕を大きく振って走る」という比較体験を提案した。また目標物があると、どうか、サッカーのようにボールを追いかける、ゴールがある、などの違いが出るか。裏庭と園庭では違いが出るか。環境によって違いが出るか、環境設定を行った。

・気づき

「腕を振ると、足が勝手に付いてくる！」「忍者のように走れる感じがする」といった、感覚的な言葉での表現がでた。その後「手と足が連動してる？」「手を動かさないで走るのは難しい」や、目標物があるとその地点まで一直線にいくことが出来る、裏庭（ゴムチップ）の方が滑らないから早く走れる。など実践に応じた気づきが多かった。

4. 保育後の振り返り

文章、動画、写真を用いて、保育終了後、園長、担任、体操指導員で情報共有を行った。

・視点の共有

指導員は「運動力学的な視点（重心の移動など）」から、担任は「子供の心理的な動機付け（なぜあの子はあそこで止まったのか）」という視点から意見を出し合った。

・「気付き」の可視化

動画の中に、自分の足元をじっと見つめたり、お友だちの動きを真似したりする「小さな気付きの瞬間」を発見した際は、翌日「昨日、〇〇君がこんな工夫をしていたね」とクラス全体にフィードバックする材料にした。

■ 環境構成

振り返りの中で出た「子供たちの興味の方向性」を、翌日の環境に反映させた。

ボール投げの角度に興味を持った日は、翌日、園庭に「ここを狙って投げると遠くへ行く」という目印のフラッグを立てるなど、探究心が途切れないような環境を考え、実践した。

■ 指導員の役割

体操指導員は「正解を教える」のではなく、子供たちの「取組をサポートする」役割を重視してもらった。職員の運動に関する知識を補い、担任のサポートを行った。また、指導員も子どもと一緒に「どうすればいいんだろうね？」と、共に学ぶ姿勢、共感を意識した。

